

ガーリック + 通信



第 35 号 2012. 9. 1 発行

市民のための公開講座・しゃべり場 開催しました。 「低線量被ばくのリスクをどう思いますか？」



2012年7月9日(月)～7月11日(水)「第49回アイソトープ・放射線研究発表会」が東京大学弥生講堂 一条ホール、セイホクギャラリーで開催され、4年連続円卓会議からも参加しました。

7月10日(火)に飯塚が「ドライフルーツなどへの放射線照射の効果や影響」と題してポスター発表を行い、7月11日(水)には、千葉さんが「新鮮果物への放射線照射の効果や影響」口頭発表をしました。

また、7月11日(水)15時50分から、円卓会議主催『市民のための公開講座・しゃべり場「低線量被ばくのリスクをどう思いますか？」』を行い、前半プログラム「お話・ディスカッション」は64名の方が、後半プログラム「しゃべり場・バズセッション」には45名の方に参加していただくことができました。

この公開講座の開催にあたり、日本アイソトープ協会の須貝様はじめ、多くの方々のご理解・ご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。(飯塚 記)

もくじ

1. しゃべり場 プログラム・・・P. 2
2. グループディスカッションまとめ・・・P. 3
3. 参加者の「振り返りシート」から・・・P. 7
4. しゃべり場を開催して・・・P. 10

市民のための公開講座・しゃべり場 プログラム

低線量被ばくのリスクをどう思いますか？

主催：食のコミュニケーション円卓会議

共催：日本アイソトープ協会、日本食品照射研協議会

日時：2012年7月11日(水) 15:30～18:30

場所：東京大学弥生講堂 セイホクギャラリー

前半 <お話し・ディスカッション> 「低線量被ばくのリスクについて」 15:50～17:30

講師：東京大学名誉教授 国連大学名誉副学長 安井 至氏

コメンテーター：毎日新聞社生活報道部編集委員 小島正美氏

原子力機構・量子ビーム 研究主席 小林泰彦氏

司会：市川 まりこ氏

そもそも福島は元にもどれるだろうか？ 元に戻るためには何が必要か・・・

福島の母親が求めているのは、リスク評価の確率的な情報ではなく、確定的 Yes、No・・・



これに専門家はどのように答えるべきなのか・・・
答えられない???もし、答えられないのなら、ど
のような情報を与えるべきなのか・・・

家族のための放射線リスク勉強会で活動している
半谷輝己さん*の活動を応援したいという趣旨で、
意見交換も行います。

*1962年福島県双葉郡双葉町生まれ。福島第一原発
事故後立ち上げられた「たむらと子どもたちの未来を考える会 (AFTC)」副代表、NPO 放射線安全
フォーラム会員、「福島ステーキホルダー調整協議会 (FSAC)」事務局長、伊達市選任アドバイザー
として、福島の復興の為に尽力している。

後半 <しゃべり場 バズセッション> (グループ討論) 17:40～18:30

「確率という呪縛を乗り越え、そして、不幸にならないための知恵とは？」様々な不安を抱えな
がら、福島で子育て中の母親にメッセージを送りたいと思います。

・オリエンテーション

自己紹介 記録と発表者を決める

・意見交換

◆グループの中で意見交換しながら、あなたの
メッセージを付箋に書いて下さい。

◆グループの中で集約できそうな時は、模造紙に
まとめのメッセージを描いて下さい

・各グループから発表

・質疑応答、まとめ



《しゃべり場グループディスカッションまとめ》

- ・参加者：45名（会員：8名(市川・小林・飯塚含)、会員外：37名(安井先生、小島様含))
- グループ着席者：40名（男性：27名、女性：13名）

【Aグループ：5名（男性：1名、女性：4名）】



《メッセージ・まとめ》

「福島の母親へのメッセージ」と言うが、子育ての不安はいつの時代、どこでも同じではないか。死亡者の出なかった東電事故を「福島」と括って取り上げることも問題だと思う。

今の日本は宗教と思える程混乱している。リーダーも含めて落ち着かないといけない。時間が解決する部分もある。互いに寄り添い、思いを受けとめあうことが大事。福島の事故から多くの母親が持っている不安には、「いい母親」の象徴のような側面もある。

《付箋》

- ・日本はみんな一緒
- ・子育て、生きていく不安は皆、抱えている。それが受けとめられると実感することが大事なのではないか。
- ・たくさんの情報がある中で受ける側が選択し、正しく知ることが大事だと思います。
- ・私は専門家ではありません。でも私の信頼できる専門家の方はだいじょうぶと言っています。安心して下さい。
- ・福島のお母さんへのメッセージ → ではなく → 日本のお母さんへのメッセージ



【Bグループ：5名（男性：4名、女性：1名）】

《付箋》

- ・放射線そのものが何であるか知りたくありませんか？何でも答えます。
- ・ココには疑問に答えてくれる人がたくさんいます。どんなことでも聞いてほしい。
- ・私は信頼できる測定器をここに持っています。何でも聞いてください。
- ・放射線の影響などで不安に思うことがあった場合は、あまり一人や家族で抱え込まず、なるべくみんなとざっくばらんに対話を重ねてみてください。
- ・放射線そのものよりも、それを怖がるストレスの方が怖い。
- ・私たちの身体からも放射線が出ています。宇宙からも、大地からも、空気中も。今のレベルは怖がらな



くても。

- ・コミュニケーションを取るには、(人間的)に信頼してもらうことが第一。
- ・研究者は使われるためにあります。自由に活用して、知識を選択してください。
- ・実は私も放射線のことはよくわからない。一緒に学びたいです。

【Cグループ：5名（男性：3名、女性：2名）】

《メッセージ・まとめ》

放射性物質だけでなく、他の色々あるリスクの中で放射性物質のリスクの大きさを考えよう。
(体験談、具体例を出しながら)

《付箋》

- ・放射線のリスクは一般に言われる程、高くない。
- ・話を聞く！共感？別の場所に行きたかったら行ってもいいと思うよ…というスタンスで、60年代のときと放射性物質の量は同じくらいみたい。その頃の大人は皆元気だしという話も。
- ・放射線の健康影響についての客観的情報を整理して提供する。一緒に意見交換する。提供内容として、身の回りの放射線、自然放射線の地域差、他のリスクとの比較。
- ・放射性物質のことばかり心配して他の危険を忘れ、全体的に考えると体・健康に悪いことにならないようにして下さい。私自身は、極わずかな残留農薬や添加物を心配するあまり、無農薬野菜にも危険な物質があることを知らず、盲信したり、油の多いスナックをおやつに与える回数が多かったです。危険な度合いを考え合わせないと本当に良い生活にはならないです。
- ・放射線についての理解、各個人の考え方の硬さ・偏りがある。総合的な「リスク」で考えてほしい。



《討論内容》

- ・その人に合った話をしたい。一人一人全員違うだろうから、対話しながら共感が大切。

60年代の核実験の頃の中学生の尿と今の福島の中学生の尿でセシウムが出る量は近いので大丈夫だろう。



ない食品をネットで買うなどを皆さんが納得した形で。

- ・そんなにリスクは高くありません。

マスコミも政治家自分の都合の良いことばかり。重要な内容をマスコミも政治家も伝えていない。

- ・なるべく対話に持ち込む。

・リスクについて全世界共通の場で話されるが人によって考えが違う。他のリスクも考え合わせないと。専門家には義務があるのではないか。

・こちらから持って行くのはダメだと思う。科学的・客観的データを整理して持っていく。基準値の意味、1ベクレルでも少

【Dグループ：4名（男性：4名）】

《メッセージ・まとめ》

- ・放射線の不安について聞く。
- ・それについて自分の思いで話すだけでなく、相手の反応をしっかり見て自分の言葉で話す。
- ・平常時のリスコミからの脱却。

《付箋》

- ・お母さんへのメッセージは思い当たりません。何が心配か聞きたい。それに対して知っていることを答える。
- ・放射線のことが心配ですよね。一緒に考えてみましょう。少し心配事が減ると良いです。
- ・相手が何に不安を持っているのかを事前に把握してコミュニケーションに臨む。
学会発表の延長ではダメ。
自分の思いをしゃべって終わりではなく、反応を確認、場数を踏む。
- ・話を聞く。平常時のリスコミからの脱却。
専門家としての信念で話す(意固地ではない)。



【Eグループ：5名（男性：4名、女性：1名）】

《付箋》

- ・食べ物で不安を少しずつ減らすことができるのではないかと思います、仕事をしています。
- ・話を聞く、不安を聞くことから始めたい。
自分も事故が起きたときは分からないので不安だと思った。でも学んでみて安心できた。一緒に知っていこう。
- ・私はあなたの不安を解消する答えを必ずしも持っていません。でも一緒に学びどうしたら良いか考えることはできます。共に行動しましょう。
- ・聴きます。
- ・家の除染は進まなくとも、遮断の技術はあるのではないかと研究しています。
- ・聴いて下さい。答えます。

【Fグループ：6名（男性：3名、女性：3名）】



《付箋》

- ・徒らに不安がらないで。話し合ったり助け合ったりすることが大切かなと思います。
- ・福島のお母さんには、何も言えない。関東近県で不安にかられていて福島産を避けているお母さんには、食品からの内部被ばくは心配しないでバランスのとれた食事を、できれば福島の農業復興の支援をと言いたい。納得できないのであれば、放射能の測定

定やデータの解釈を一緒に考えたい。

- ・確かにどんなに注意していても放射性物質を口にするかもしれません。ですが、今、口にする放射性物質は何でしょう？その生物学的半減期はどのくらいでしょう？だから大丈夫ですよ。放射性物質は蓄積するとは限りません。
- ・福島のお米を買ってあげる運動を首都圏で展開すべき。
- ・被害は福島以外の人も含めてみんなで分け合って受け入れて解決していきましょう。

【Gグループ：6名（男性：5名、女性：1名）】

《メッセージ・まとめ》

- ・どれだけ相手の立場を慮れるか？
- ・話をまず聴く。
- ・信頼して頂けるか。
- ・安心は自分で解決するしかない。
- ・Heart to 心で「いかがされていますか？」



《付箋》

- ・お話を一生懸命聴きます。
- ・いかがですか？
- ・不安に思うと思いますが情報をしっかり聞いてほしいです。



- ・お子さんは大丈夫だと思います。
- ・まず相手の立場に立つ。
安全・・・ある程度の基準がある
安心・・・人により異なる。安心を得るには個人の努力が必要。
- ・外部被ばくは大丈夫！！でも食べ物には注意して。

【Hグループ：4名（男性：3名、女性：1名）】

《メッセージ・まとめ》

- ・まず、福島に行くこと。何を語らずとも、気楽に → 福島応援中(事故後初めていわき市、郡山市、福島市を訪問)
- ・福島の方と会うこと。求めているものを知ること。
- ・自立することを気付かせること。被害者意識のままでは復興できない。前を向いて。
- ・科学者は神でも仏でもない！全知全能ではない。現状、自分の周り、位置を自分で探して。
- ・人にはそれぞれ重荷を背負っています。原発事故は、とてつもない重荷です。頑張って乗り越えてください。



《しゃべり場ふりかえりシート》 (回答 32名)

1. 特に印象的だったことは

- ・会議全体で自由に意見が言える雰囲気。
- ・福島の放牧の話。
- ・グループディスカッションで心理学的な話し合いができたこと。
- ・色々な職種の方の意見を聞いたこと。
- ・様々な立場の方とお話できたこと。「メディア情報」に振り回されてはいけない！
- ・リスクコミュニケーションに関して、どのように理解すべきなのか考えるきっかけを得られました。
- ・安井先生の話が面白かった。やはり思ったことは抑制せず言わざるを得ない。コミュニケーションは合理的には割り切れない。美しい言葉では表現できない。
- ・福島の母子へのメッセージで、8つのグループでこれほどまでに異なるのかと思った。
- ・女性が多かったこと。
- ・安心を得るには、安心を与えるには、相手の立場に立つ。
- ・細胞間のコミュニケーションがあるよ。
- ・「低線量被ばく」について、科学的な根拠による断定はできないことがはっきりしました。

不安をあおってストレスを与えたりすることは、絶対に避けるべき。

- ・市民測定の危険性。
- ・皆さんが活発に意見を出されたこと。
- ・最後の一言「メディア情報に振り回されるな」
- ・不安に寄り添うこと、原子力の専門家の皆さんも悩んでいることを知りました。
- ・畜産農家の大変な状況を知ったこと。専門家以外の人(一般のお母さん方など)も知識、関心があるのだと思った。
- ・皆様がそれぞれの立場で真剣に議論された問題意識の高さ。
- ・安井先生の講演（と河西先生の主張）
- ・専門家では意見が分かれること。
- ・議論が尽きなかったこと。
- ・福島のお母さんにとというのが難しかった。
- ・知識が多いとどうしても説明しよう、説得しよう、理解させようとしてしまいます。「聴く」ことの大切さを改めて肝に命じました。
- ・人それぞれを感じた。
- ・「ロシア 経済状況が悪くなって人口が減った」ということを知らなかったので、そうなんだと思いました。

安井先生の話の始めの「ルカ伝」は興味深く印象的でした。

- ・低リスク事象の判定の困難さ。
技術論だけで一般民衆を納得させる難しさ。
- ・グループ毎に出したメッセージ。専門家も市民に歩み寄りたいたいという気持ちを持っていることを知った。
- ・知らない方と意見交換ができた。
- ・農耕文化ではリスク感覚が育たないという話。羊99匹の話は、「アラビアのローレンス」で、砂漠で一人脱落した仲間をローレンスが助けて帰り、英雄になるという話と共通し、ラテン文化の根底を感じました。

2. もっと知りたいことは

- ・ガンの発症確率の分かりやすい説明方法。
- ・生物学的半減期は、どうやったら調べられますか？
- ・前に進むために何が必要か。
- ・食品の数値(放射能)が出た、出ないことに関して主婦の皆さんのご意見を知りたい。
- ・バイスタンダー効果、良い方と悪い方ということだったが、悪い方しか聞いていない。
ECRR等への反論はどうできる？
- ・1 mSv/年の設定根拠、どう伝えるか！！
- ・「乳幼児」や「子ども」と放射線量について、もっと具体的な説明が必要だと思います。
- ・どのように難しい放射線・原子力のことを話すか。良いインタープリターになる方法。
お手本がほしい。
- ・レバー刺しの放射線照射
- ・どう行動したら良いか。どんなアイデアがあるか対話したかった。

- ・福島のお母さんが何を知りたいか。どうしてほしいか。
- ・低線量放射線影響について体系的に知りたい。
- ・クライシスコミュニケーションの話。
- ・100 mSv 以下でも本当に影響があるのか否か。
- ・同じテーマを深める値打ちがある。
- ・バイスタンダー効果 聞いていたはずで分かっていないということに改めて気付きました。
- ・現場で働いている人、住んでいる人の日常レベルでの話。
- ・山ほどあります。
- ・内部被ばくの安全レベルの科学的根拠です。

3. 本日のご感想などをお聞かせください。

- ・放射線広報をしていますが、専門的に活動している方々の話が聞けて良かったです。
- ・関東の消費者やデモの人に向けたメッセージを考えたい。
- ・色々な意見を聞けてとても勉強になりました。自分自身の知識を深めて、コミュニケーションとしてのスキルを上げたい。
- ・事故から一歩進まなくてはいけない。福島の方々も被害者から放射線知識人の第一人者になるくらいの気持ちになってほしいなあと感じました。
- ・参加して本当に良かったです。
- ・とても頭がこなれました。コミュニケーション技術と言葉で合理的に説明するのは至難。これは殆ど無意識にされた自然な作法です。
- ・記事を書く際には気をつけます。
- ・いろいろな方(放射線専門家、高校の先生、プレス関係他)とグループ討議ができ、非常に有益でした。
- ・リスクコミュニケーションの必要性を感じた。
- ・批判的な方も交えた場が必要ですね。
疫学の専門家も入れたレクチャーも入ると良かったですね。
- ・良かったです。
- ・当然ですが、科学者ばかり。一人の科学者に大勢の市民ではなく、こういう場にもっと市民参加があっても良いと思う。
- ・大変勉強になり、また色々な方の話が聞けて、話し合いを通して楽しくコミュニケーションができました。ありがとうございます。バズセッションもかなり達成感があり、各グループそれぞれ違った視点の発表で勉強になりました。
- ・初めての参加ですが、多くの情報が得られました。講演があるのでタイムリーでした。
- ・大変良い企画だったと思います。若い学生の方々の話をもっと聞きたかった。
- ・この円卓会議は行動を起こせ。「福島の米を食べる会」「福島の肉を食べる会」を開催せよ。
- ・私が住む街の不安を持つお母さんたちに本日の話を伝えます。
- ・貴重な時間をありがとうございました。
- ・いろいろな話を聞く良い機会となりました。福島における放射線被ばくの影響の健康リスクについて明らかにするための科学的データの体系化と、一般人にも理解しやすいような翻訳(テキスト)が必要と感じました。

- ・食の安全を考えている人にもっと参加してほしかった。
- ・お母さんへの回答をなかなか書けずに困りました。
- ・来て良かった。仕事へのモチベーションが上がった。福島・栃木の A5 の牛肉を安く食べたいという老人を何人も知っています。でも手に入らない。
- ・専門家の頭の中にあることと現場の不安をつなげる、まずはその気持ちから。人の手も借りてコミュニケーションの輪を広げるべきかと思いました。
- ・“わからない”リテラシーも大切ではないでしょうか？私たちは多くの“わからない”ものの中で暮らしています。“わからないこと”を“わかる”リテラシー = 受容を育てませんか？
- ・もう少し議論が必要。
- ・有意義な意見交換ができた。
- ・最後、盛り上がったところで時間切れ、残念！きりが無いのも事実ですよ。
- ・安井先生のお話とグループディスカッションをバランスよくできて良かった。最後の質疑応答の時間がもっとあってもいいかと思いました。
- ・時間が足りないが、いつも足りないでしょう。でも十分に刺激をいただいた。
- ・このような機会を作ってほしいと思うように充実した会で満足している。
- ・グループ討論に初めて参加しましたが楽しかった。時間が短くて、各自の意見を引き出しきれていないという感じでした。

《しゃべり場を開催して》



2012年 夏 しゃべり場の感想 (小林 記)

円卓開催の「しゃべり場」はこれで3回目。バズセッションに慣れてきたとはいえ、今回は初めての会場に移り、安井先生と小島記者を講師とコメンテーターにお招きするという新しい試みも。人気サイト「市民のための環境学ガイド」のA君、B君、C先生を真似したつもりですが、さてさて…

フロアからの活発な意見に耳を傾けるうちに感じたことは、放射線防護の実務家と、放射線生物学の研究者の感覚の違いのようなものです。放射線被ばくによる有害な影響を未然に防ぐための防護策を考えることと、人体への放射線影響の有無やその程度についての真実を探求することは、実は別問題です。ICRPの委員の間では、それぞれの立場から激しい議論の応酬が行われているのではないかと想像します。その中身、つまり現在の放射線防護のポリシー決定に至った議論の過程を、社会の中でオープンに共有できていなかったことが現在のような混乱を招いたのではないのでしょうか？

今回の参加者は、一般市民というより放射線利用や防護、リスコミの関係者が多かったようです。ならば、善かれと思って事実上のゼロリスクを指向してきた現在の放射線防護のポリシーが、いざ不幸な事故が起こったとたんに多くの誤解と不適切な行動を招き、大勢の人々を苦しめている現状を直視し、その反省と防護ポリシーの再検討の決意が、もっと語られるべきではなかったのでしょうか…？

グループ討論のテーマに掲げた「福島のお母さんへのメッセージ」に関連して、その日、思い浮かんだことをいくつか書き留めておこうと思います。

1) 相手の不安に寄り添い、怒りや悲しみまでも共有しようと努めることと、科学的事実を元に合理的で冷静な判断を示すことを、同じ人間が一度にこなすのは難しいのではないだろうか？ 上手な役割分担と、それぞれの役割の間での助け合いはできないものだろうか…

2) わずかな放射線や放射性物質を気にする自由もあれば気にしない自由もある、個人の価値観の問題、と突き放すのは、いかにも理解があるようでいて、実は不誠実な態度ではないか？ 安全だという結論を強調すると、危険だと思い込んで不安がっているヒトには届かない… その通りかもしれない。安全か危険かという結論を示すより、判断の土台となるデータを出すことが大事… それも正しい。しかし、科学的根拠だけでは決着のつかない意見の相違、例えば畝山智香子さんが近著(注 1)に書かれていた「病気で子どもが死ぬのは自然なことだから仕方がないが、予防接種による被害は人為的なことだから許されない」のような価値観の違いによる意見の違いと、「100 ミリシーベルト以下の影響はよくわかっていない」のような単なる誤解やデータの解釈の間違いによる混乱は、明確に区別して、説明されるべきだと思う。

(注 1) 畝山智香子<「安全な食べもの」ってなんだろう？ 放射線と食品のリスクを考える> 日本評論社
(2011 年 10 月)

3) 科学の使命の一つは、物質世界の知識と技術の探求で人々の生活の便利、快適、安全を向上させること、もう一つは、今まで知らなかったことを知ることで世界観を広げ、喜びや満足感、精神的安堵を得ること。放射線が決して得体の知れない不気味な存在ではなく、物理法則に貫かれた自然現象であることを知り、我々人間はその原理を理解し、その作用を予測できると考えることで、放射線被ばくが増すような事態に直面しても、知らないことによる不安や恐怖を克服し、根拠のない噂やデマを退け、冷静かつ適切に対処する自信を持てる。これこそが科学の力であり、それを国民みんなで共有することが理科教育の目的ではなかったか？ 「放射線と被ばくの問題を考えるための副読本 ～“減思力(げんしりょく)”を防ぎ、判断力・批判力を育むために～」という、天に唾するようなタイトルの、福島大学有志による副読本は、それを逆説的に教えてくれているような気がしてならない。



しゃべり場 の感想 (市川 記)

今年で3回目になる「しゃべり場」は、構想を練るところから始めるので、私の中ではとても楽しみな企画のひとつです。今回も半年以上前からいろいろ思いを巡らしました。

2011年3月に起きた東日本大震災による原子力発電所事故後、放射線や放射能に関する玉石混合の情報が飛び交いました。特に低線量被ばくのリスクについて、ニュース等では「100 ミリシーベルト以下の影響はよくわかっていない」という言い方をしていました。低線量被ばくのリスクについては

様々な考え方がありますが、その中には、科学的コンセンサスを得ている考え方と、そうでないものがあります。さらに、同じ科学的・客観的事実についても、多様な判断があり得るでしょう。このような状況の中で、例えば、幼い子どもを持つ母親にはどのようなアドバイスが役に立つのでしょうか。また、誰がどのように伝えればより信頼されるのでしょうか。しゃべり場に集う、様々な立場の人々と共に、学び語り合いながら一緒に考えてみたいと思いました。

今回は、「市民のための環境学ガイド」というホームページ等を通して、科学的根拠に基づくメッセージを伝え続けていらっしゃる安井先生を講師にお招きしました。そして、新聞記者の小島正美さん、会員でもある小林泰彦さんにコメンテーターをお願いしました。前半は、安井先生のお話を、私を含めて4人でやりとりしながら、フロアからの意見なども交えて進めるという新しい試みとなりました。後半のグループ討論では、「福島のお母さんへのメッセージ」というテーマで、50分ほど、グループ毎に顔つき合わせて議論してもらいました。前半の安井先生のお話を受けてという流れをイメージしていたのですが、安井先生のお話は、かなり広範囲のものを含んでいて、ダイレクトに福島のお母さんへのメッセージへは結びつきにくかったような印象を持ちました。それでも、一旦バズセッションが始まると、活発な議論の坩堝となりました。参加者のそれぞれの思いを述べ合うことから始まりました。色々な立場の方の思いを聞きながら自分の思いも述べながら、30分ほどの議論の後、大きめの付箋にそれぞれのメッセージを書いてもらいました。グループの中でメッセージを共有した後、全体討論では、グループ代表の方に議論の概要を報告してもらいました。全体をひとつにまとめるということはとてもできない多様な思いが込められていると思いました。それらを参加者同士で共有出来て良かったと思いました。

「低線量被ばくのリスクをどう思いますか」というようなテーマで、誰かと議論や意見交換することは、普通の市民にとっては普段なかなかできないことです。昨年から今に至るまでの間に、このようなオープンな議論の場がもっとあちこちに必要だったのかもしれない。大事なことは、今回のしゃべり場のように、聞く耳を持つ市民を介在させながら議論を共有していくことだろうと思います。今回、公開しゃべり場という「場」で、色々な思いのやり取りができて良かったと改めて実感しました。

編集後記

今年で3回目の開催となった「しゃべり場」の会場は、昨年までとは異なる東京大学弥生講堂 セイホクギャラリーに変わり、会場のイメージが掴めませんでした。しかも3時間の長丁場で、プログラムも2部構成という初めての試みですし、うまく出来るのか不安でした。同じ会場で12:45から行われていた口頭発表が白熱し、終了予定時刻をオーバーしたため20分ほど遅れて15:50から「しゃべり場」を始めることになり、かなり焦りました。不安や焦りに反して、前半の「お話・ディスカッション」には64名、後半の「バズセッション」には45名の方に参加していただきました。予定よりも後半の「バズセッション」の時間が短くなり、物足りないなどと思われた方が多かったのではと心配になりましたが、「ふりかえりシート」の感想には「参加して良かった」、「勉強になった」などの感想が多く、ホッとしました。

会場のセイホクギャラリーは、木質構造によるHPシェル構造(曲面板構造、貝殻構造とも呼ばれる)で、薄い曲面板で天井から包まれて守られているような心地よさがあり、「しゃべり場」の雰囲気合っていたように感じました。(飯塚 記)